新発田藩の蔵書目録について

－九代藩主・溝口直侯の「本草学」との関係を中心に－

岩本　篤志

はじめに

新発田藩は、藩校をおいた八代溝口直養(なおやす、1736～1797）、蒐書家で知られた九代直侯（なおとき・なおよし、1778～1802）、積極的な学問振興策をとった十代直諒(なおあき、1799～1858）など好学の藩主を輩出した。山崎闇斎を祖とする崎門朱子学を信奉したことでしられるほか、庶民への学問奨励や藩版の刊行など文教政策に顕著な施策をおこなった藩として注目されてきた[1]。

しかし、新発田藩や藩主溝口家の蔵書がどのような変遷を経てどのくらいの規模にいたったのかについては、十分に知られていない[2]。新発田藩の蔵書のうち「若干」が新発田市立図書館に現存するが、それを藩蔵書全体の中でどう評価できるか、依拠すべき資料に乏しい。ただ前稿までに述べてきたように藩校の蔵書の全貌とその変遷を知ることは典籍の流通や学問学派の展開のみならず、藩と地域社会の関係を考える上でも重要におもわれる[3]。

このことに関して注目すべき論文、栗田元次「近世における大名の好学と溝口直侯」は昭和八年に発表されたものながら、新発田藩の蔵書に言及する際によく引用されてきた[4]。栗田は執筆に際して、新発田藩の『諸書籍読見済留記』2 冊、『諸書籍渉猟鈔』13 冊、『諸聞割記』『諸所買上書籍留記』『書籍類借受戻留帳』『先考所蔵書目』『新発田御蔵書目録』『江戸御蔵書目』『従矢之倉来御書物帳』『軍書目』『古武鑑目録』各 1 冊という計 11 点 24 冊を落手していた。そして直侯が十九歳頃から歿する二十五歳まで、本草学を中心とした幅広いジャンルの書籍を渉猟し詳細な読書記録をつけていたことなどを披露した。後述のように新発田市立図書館にも藩の蔵書目録関連資料がわずかに残されてはいるが､栗田が紹介した資料にボリューム、内容ともに匹敵するものではない。惜しむらくは広島にあった栗田の蔵書は火災や戦災で過半を焼失しており、全容を把握する機会が失われたとおもわれることであった。

ただ資料は必ずしもゆかりある土地にとどまっているわけではない。愛知県の西尾市岩瀬文庫に収蔵される『修徳院書籍目録』および『修徳院書籍冊数改書並由来書』は、修徳院、すなわち九代溝口直侯の廟号を冠する書目とその由来書であり、直侯が本草学に強い関心を抱いていた様子や藩の学問への考えをうかがうことができる。これまでに後者は読書記録の研究資料としてもちいられたが[5]、新発田藩の蔵書形成史における位置づけはあきらかにされておらず、前者は管見の限り言及されたことがない。

本稿は栗田の示した資料にこれら新出資料をくわえ、新発田藩の旧蔵書群のあらましをあらためて把握しようとこころみたものである。

1. 既知の書目の書写年代とその特徴

まず既に分析、解説されている既知の書目について紹介していきたい。前述のように栗田所蔵の書目は焼失したとおもわれ、行方不明だが、論著に多くの情報が示されているのは幸いである。以下、「栗田文庫善本書目」より書目の特徴に関して記された部分を抜粋[6]、段下げにして示し、栗田の所見を整理した。なお、旧仮名遣いは現代仮名遣いに、冊数枚数の表記はアラビア数字にあらためた。（　）部分は栗田元次「近世における大名の好学と溝口直侯」に依拠して補記した。

①『諸聞劄記』2 冊、寛政九年

寛政九年九月より同十年四月に至る雑記なり。本草に関すること多し。横本 54 枚。（先代直養の聞書に依ったものであるが異事珍説が多く、本草に関することが稍多い。直侯自筆と思われる）

②『諸書籍読見済留記』2 冊、寛政十年～十三年（前編は紙表紙、61×200mm、総紙数 26 枚墨附 24 枚、後編は絹表紙、86×200mm、総紙数 77 枚墨附 24 枚）

溝口直侯の寛政十年七月に懐中用小冊子を作り、寛政八年以来読了せる書物とその時日を記せるを同十三年に至り小に過ぐるとて稍々大にして正月より続け記し、享和元年末に至れるものなり。時刻まで記せる上、朝夜等を色分にし、且読書法の工夫まで述べたり。墨附 54 枚。(直侯が侍臣柴山源十郎に記させたもの。読書法として「読見」（通読）と「見当」(一部を見る）、吟味探索（事項を調査する）の三種に分け、「読見」をさらに本を読む場所や読んだ時間ごとに細かく分けて記録している。後編は直侯が亡くなる前年の享和元年止まりで 50 枚余の白紙が残されている）

③『諸書籍渉猟鈔』13 冊、寛政十二年～享和二年

寛政十二年三月より享和二年八月に至る溝口直侯の読書の際、後の記憶のため抄出せるもの。稿本 817 枚。(直侯自筆。第 1 冊、第 7 冊～第 12 冊が新発田で記録されたもの、それ以外は江戸で記録されたものである）

④『諸所買上書籍留記』、享和二年

享和二年正月より四月の間に於ける京・江戸・大坂より買入書物の記録にして冊数代金及び買入の事情を記す。横本 16 枚。(直侯自筆と思われる）

⑤『書籍類借受戻留帳』、享和二年

横本23枚。享和二年五月より八月まで書肆より送来りしを買わずして返せるものを記す。即寛政八年以後は読書目を記し、同十二年よりはその抄出を初め、享和二年正月よりは購

入書を記し、この年五月より返却のものまで記したるもの。(直侯自筆と思われる）

「溝口家蔵書目録」　6 冊（⑥『先考所蔵書目』、⑦『新発田御蔵書目録』、⑧『江戸御蔵書目録』、⑨『従矢之倉来御書物帳』、⑩『軍書目』、⑪『古武鑑目録』）

6 冊中 4 冊は御書籍目録と言えど､その成立明ならず｡何れにありしかも不明のもの多し。稿本 125 枚。先考所蔵書目も健斎（直諒）の作成せしめしものかと思わるれど明ならず。「先考御一覧」、「一覧」、「人をして読ましめしもの」等符号を附す。横本 83 枚。古武鑑目録は寛永三年より文化十一年までの目録にして、刊行年月冊数を記すのみにて、書名は悉く武鑑とのみ記し、発行者をも挙げざるは遺憾なり。寛永三年の武鑑 3 巻 1 冊とあるは珍なれど刊本か疑わし。寛政二年以後の分に何月改とせるは袋に記せる所によるものなるべし。9 枚。以上 6 部を収めし箱に「溝口健斎公遺書」と記せり。（⑨は直養の手許にあったものらしく、⑧および⑦は直侯の手許にあったもの以外の蔵書目と思われる）

栗田「近世における大名の好学と溝口直侯」ではこのうち、②『諸書籍読見済留記』、③『諸書籍渉猟鈔』をとくに詳しく扱っており、元の姿をかなりの程度まで把握できる。また⑥『先考所蔵書目』については栗田によってその構成、収録部数および冊数が記録されており、およそを知ることができるので以下に大分類だけを示しておく。

⑥『先考所蔵書目』（直侯の文庫と思われる）

御秘蔵書目　137 部　649 冊

唐本類　56 部　832 冊

倭本類　1218 部　5485 冊　97 枚

総計　1411 部　6966 冊　97 枚

そのほかは部数だけが示されており、以下の通りである。

⑨『従矢之倉来御書物帳』　473 部

⑧『江戸御蔵書目録』　246 部

⑦『新発田御蔵書目録』　439 部

内　御書物大帳　184 部

御書物筆記類　136 部

講堂付書目　119 部

(⑦⑧⑨計）1158 部

『新発田御蔵書目録』のうち、講堂付書目というのが藩校「講堂」におかれた典籍であろう。つまり、新発田藩は藩主の蔵書量が圧倒的に多く、そのほかの蔵書も藩士が出入りする講堂におかれたわけではなかった。藩士が典籍を閲覧できる自由度はきわめて低かったのではないかと推測される。この後、講堂におかれた典籍は徐々に増えていった可能性もあるが、基本的に崎門学の典籍であったと推測される[7]。

2. 現存する書目の書写年とその特徴

次に現存する新発田藩の蔵書目録及びその関連資料を整理しておきたい。

⑫『修徳院書籍目録』　1 冊 136 丁　28cm×18cm、西尾市岩瀬文庫蔵（155 函 44 号）

題箋は「修徳院様御筆」、内題は「溝口家蔵書目録」。「岩瀬文庫」の蔵書印あり。修徳院は 9 代藩主直侯（なおとき）の廟名。いろは(漢字表記）排列で 1334 部という書名数を収録しており、この数は次の直諒期につくられたとみられる⑥の「総計　1411 部　6966 冊　97 枚」にほぼ匹敵し[8]、新発田藩に関する現存書目中、最大の蔵書数を収録する。1334 部のうち 530 部の書名の上に●が記されている。新発田と江戸藩邸所蔵が判別できるようにしたとも考えられるが、②『諸書籍読見済留記』の新発田、江戸読了分の書籍名には一致しない。むしろおおかたは②でコメントした典籍に一致するようで、どの典籍について記録をとったかを示したようである。本草学や地誌が中心で貝原益軒や新井白石の著作物がめだつ蒐書傾向があり、栗田論文の指摘に一致する。題箋はその父の学問に関心を抱いていた直諒期あたりにつけたと推測される[9]。②や次の⑬に収録される書籍名との関係から見て、およそ享和元年時の蔵書目録と見られる。⑫はその蔵書数から見て新発田と江戸藩邸におかれた蔵書をすべて含んでいるとおもわれる。

また、この資料は⑬とともに、昭和十年刊行の岩瀬文庫の目録にすでに収録されていることから[10]、昭和八年に栗田が紹介し、その後も所蔵していた目録類とは別に岩瀬氏に売却されたもので、焼失したと思われる栗田の資料を補完する。おおかたの蔵書目録が現存しないなか、新発田藩の蔵書形成過程を知るうえで重要な存在である。

⑬『修徳院書籍冊数改書並由来書』　一軸　西尾市岩瀬文庫蔵（丑函 15 号）

表題は「書籍冊数改書並由来書」。岩瀬文庫の昭和十一年刊行の目録で「修徳院書籍冊数改書並由来書」とされている。「岩瀬文庫」の蔵書印あり。享和元年八月の記録で、手元附書籍の総冊数を新発田に 5616 冊、江戸に 1377 冊あわせて 6993 冊になると数えている。次に直侯が幼少の頃からどのような読書遍歴を経たかを記した自伝的部分があり、さらに小野蘭山や加賀藩、三都の書肆（須原屋、伏水屋、笹屋の名がある）から書籍を入手した経過を記す蔵書形成史的な記録部分がつづく。末尾には「四季の友」とされる文章が付されている。②『諸書籍読見済留記』を分析した栗田によれば、直侯は「山水花木を詠じた詩歌及びこれを論じた文」をしばしば抄録していたとされるので、「四季の友」もその類かとおもわれる。現段階では筆者は他の直侯の筆を確認していないが、以上の内容から考えて、一軸すべて直侯の自筆と推定される。この資料については先行研究に言及がある[11]。

⑭『旧君公御蔵書目録』　１冊　18 丁　新発田市立図書館蔵（V01 学芸-1）

印記不明の蔵書印一顆あり。現行の表紙は近年つけられたものとみられる。内題に「舊君公御藏書目録」とあり、全 385 部が収録されている。蔵書は特に分類がなされていないが、崎門学派の講義録や学派が重視した典籍が際だってめだつ。それ以外の典籍には直侯が集めたとみられる書名を散見するがわずかでしかない。そのほとんどは 17 世紀から 18 世紀成立の典籍と思われるが、1859 年に刊行された『馮几録』とおもわれるものや、明治のものとおもわれる『公議所日誌』が含まれている。またここに記録されているものの多くが新発田市立図書館に現存することから、廃藩となった前後、明治期に作成された目録ではないかと推測しておく。

⑮『官庫書目録抄』天・地２冊　１冊目 91 丁・２冊目 102 丁　新発田市立図書館蔵（V09 教-278(1)/(2)）

2 冊とも一丁目に印記「家藏」「新發田藩道學堂圖書印」あり。第 2 冊目跋記を記した背面に上下逆に「文化庚午昌平藏書目録書目」と記されており、もとはこの一丁が表紙であった可能性がある。林家の著作物を「家著」に分類しているほか、幕府が買い上げた木村孔恭（兼葭堂）の蔵書を含んでいる特徴などから[12]、昌平黌の書目を写したものと見てよいであろう。文化七年の序（1810）、同年の跋がある。

序に続いて凡例が記されており、本来、庫外には持ち出せない書目を友田厚質なる人物に書写してもらったこと[13]、新収書については十分に記録されてない場合があること、近年、木村兼葭堂の蔵書を幕府で購入したのでそれらについては「兼」字を付した旨が記されていることが記される。目録中の書名の上に朱で「兼」を記したものが多数見られる。1 冊目は和書を収録し、「賜書」「神書」「帝紀」「公事」「政要」・・・・とつづく独自の分類、2 冊目は漢籍を収録し「小学類」「正史類」「雑史」「史抄」「故事」「譜牒」「儒家」・・・・となっており、四庫分類ではない。なお現在影印刊行されている安政四年（1857）の『昌平黌蔵書目録』は四庫分類になっており[14]、昌平黌の蔵書分類の変遷をうかがうことができる[15]。

跋記には自分は五十近くになるのに十三経や二十二史を一通り読むことさえできておらず、学問の広きを知り自らの怠慢を嘆くといった内容が書かれている。署名に「直亮」とあるが、現時点では不詳である。

以上、前節でしめした①から本節の最後にあげた⑮までを通して類別すると、藩主の御蔵書目録（⑥⑨⑫⑭）、藩主の読書記録(①②③）、新発田および江戸藩邸におかれた蔵書目録（⑦⑧）、特定の種類の書籍だけを記録した目録（⑩⑪）、蒐書の経緯や読書記録を記した記録類（①②③④⑤⑬）、他所の蔵書目録（⑮）となる。

直侯自身によるイロハ排列の⑫『修徳院書籍目録』があるのに、直諒期に⑥『先考所蔵書目』が作成されたのは、分野別に記載し直すことで父、直侯の学問を理解しようとしたと推測される。

少々問題なのは藩主の御蔵書目録としてまとめられたものと、新発田および江戸藩邸という場所によってわけて書かれた蔵書目録の関係である。⑫は⑬からみて新発田および江戸藩邸におかれた蔵書を含んでいると考えられる一方、⑦⑧は場所別にわけて書いている。⑦⑧は「溝口健斎公遺書」と書かれた箱に入っていたというのだから、直諒（号のひとつは健斎）期の直諒個人の蔵書をふくむ藩蔵書全ての目録である可能性もあろう。

ただ栗田は⑥『先考所蔵書目』を「直侯のお手許品だけとおもわれる」とし、⑦⑧を「藩の蔵書は直接彼の好学と関係しないが」として扱っており、その中身はさほど重複がないとみたようである。それにもとづけば、藩主の蔵書も藩の蔵書もそれぞれ新発田と江戸にと分蔵されていたことになると思われる。

また、現存する⑫と⑭の関係に眼を向けると、⑫に含まれないが、⑭にふくまれる直養の筆記類（例：『尚志遺事』）や藩版（例：『昨非抄』）があるので、⑫には直養の遺した書籍が含まれていない場合があることがわかる。さらに、⑫に含まれ、⑭にもふくまれる特徴的な書名（例：『広東新語』、『與土肥氏書』等）が確認できる。さらに⑭の収録部数が少ないのは廃藩後、残存した典籍を収録したためと推測する。

これらを総合し、記録内容の年代、所蔵場所別に整理してみたのが、次の表である。実際、中身を確認できない書目が多いうえに、依拠した栗田の分析も目録同士の関係については歯切れがわるい。あくまで従来の推測に推測を重ねた整理にすぎないことを断っておく。

<table>
<tr><th></th><th>藩主</th><th>新発田</th><th>江戸</th><th>関連の記録</th><th>蔵書数</th></tr>
<tr><td>直養期</td><td colspan="2">⑨従矢之倉来御書物帳</td><td></td><td></td><td>473部</td></tr>
<tr><td rowspan="2">直侯期</td><td>⑫修徳院書籍目録</td><td></td><td></td><td>①～⑤⑬</td><td>1334部</td></tr>
<tr><td>⑥先考所蔵書目</td><td>⑦新発田御蔵書目録</td><td>⑧江戸御蔵書目録</td><td>⑩⑪⑮</td><td>2096部
(1411+439+246)</td></tr>
<tr><td>直諒～直正期</td><td colspan="4">不明</td><td></td></tr>
<tr><td>明治</td><td colspan="3">⑭旧君公御蔵書目録</td><td></td><td>385部</td></tr>
</table>

以上を検証していくには、現存する⑫と⑭からわかる個々の書籍の継承関係だけでなく、直養期から直諒期の藩と藩主の学問との関係をよく理解する必要があろう。次にこの蔵書形成の変遷の鍵を握る直侯の学問について詳しく見ておきたい。

3. 溝口直侯の学問　－　朱子学と本草学のはざまで

直養以降、直侯をのぞく藩主は代々、崎門学を奉じた。その直侯については『新発田市史』（上）に「八代藩主直養が崎門学を修めて、それに関する多数の筆記や著述を残したのに反し、直侯は崎門学の偏屈を喜ばず、儒学のみならず国学にも心をよせて儒学者の中国崇拝を排斥した」とあり、また「前藩主直養は、山崎先生門下の佐藤直方先生の学派を学ぶべしと、子孫に示す書に記したが、直侯は直方派の崎門学の中国崇拝は好まなかったのである。しかし藩学の

改革は行わなかった。直侯が好んだ書籍は、本草学であったという。病弱であったせいであろうか」とある[16]。

では直侯は「直方派の崎門学の中国崇拝」を好まず、「病弱であったゆえに本草学を好み」膨大でその特徴的な蔵書をつくるに至ったと理解してよいのであろうか。栗田の論文にみえる各記録の引用と直侯直筆と思われる⑬⑭等に依拠してあらためて考えてみたい。

(1) 直侯の崎門朱子学批判

先代、溝口直養は若い頃、家臣にすすめられ、崎門学を学び、安永五年、四十一歳の時に示した「示子孫及諸臣」において、人は誰であれ必ず学問をするべきもので、聖賢の書をよまねばならないとし、「尭舜以来孔曽思孟其後ニ至テ周程張朱、吾邦ニテハ山崎先生、其門佐藤先生、尚斎先生、佐藤先生ノ門迂斎先生、尚斎先生之門訂斎先生ノ類ノ学筋ヲ慕ヒ学ブベシ。他ノ学筋ヲ雑ユル勿レ」と崎門学の尊崇を勧めた。またそれを藩令や藩律のなかにまで規定した[17]。藩校「講堂」や社講制度が設けられたのもその方針を徹底するためであったといえる。こうして学問と政治を緊密に結びつけた新発田藩のスタイルが確立､継承されていくことになる。

直侯は直養の弟の子で、直養は天明六年に引退[18]、直侯はわずか九歳で藩主となり、以後、佐藤尚志（明善）など藩の崎門学者らがその学習指導にあたった。そして直養が亡くなった寛政九年からは直侯が実際に藩政をみることとなったとおもわれる。

直侯が寛政十年に読書記録②『諸書籍読見済留記』を書き始めたのは、この先代による環境を脱したことがきっかけであろう。実際、②には、自らの学派を自慢する藩の崎門学者への批判がしきりに記されており、直侯は崎門学を学ばなければならない環境にあって、それを鵜呑みにせず、注意深く観察していたようである。

②の『大学衍義補』の箇所に次のようにあるという。

> 今時の朱子学者というを見るに、本藩のごとき偏なるは何んぞ朱子の意に遵わんや。貝原・新井等の朱子学と同日に語るべからず（中略）本藩の朱子学と唱う中には朱子の意に叶わぬもの間々多しとしるべし。[19]

ここで直侯は自藩の朱子学を批判している。また⑬『修徳院書籍冊数改書並由来書』にも、十二、十三のころに四書・小学・論孟・近思録を少しずつ読み習いしたが、「甚だ嫌いにて掟計（ばかり）」といい、十八、十九歳には佐藤明善と五経の読み合わせをはじめたが、二十、二十一の頃までには止めてしまったとある。四書・小学・論孟・近思録とは、新発田藩が崎門朱子学を徹底するため、藩校や社講で読むことを勧めていたテキストである。

このように先代が建てた藩の方針に対し、独自の意見をもっていた直侯は、いずれ先代以来の重臣たちと対立する可能性があった[20]。一方、直侯自身の個人的な関心に端を発した「自読」は、近臣に全く理解されていなかった。直侯は読書によって貝原益軒や新井白石の著書を高く評価し、それに注を加えていたが、近臣はそれを長年、他書を書き写したにすぎず、直侯が自

身で判断を加えているとは思っていなかったらしいことを直侯自身が記している[21]。

ではこのような直侯の学問への意識はどこに端を発したのだろうか。⑬『修徳院書籍冊数改書並由来書』によると、直侯が書籍に関心をもったのは六、七歳の頃、江戸にて武者絵本に色をぬったりしたことが初めであったとし、その後、興味のままに軍書などに目を通し、十三、十四歳で草木や園芸に関心をもち､その種類や栽培法を記した地錦抄の類に目を通したという。直侯は幼少の頃から絵本の類を実際と引き比べて事物を知る楽しみや、人物の活写などに興味を覚え、書籍への関心を深めていき、「自読の功」にて漢文の白文を読む力やその学問の手法を会得していったようである。崎門学の典籍はしばしば仮名交じり文でかかれており、その修養は必ずしも彼が漢籍を読むのに役立たなかったようである[22]。彼の漢籍の所蔵量が少ないのは、白文を読む力がついたのが晩かったためで、漢学－国学を対比的にとらえていたためではない。たとえば湯浅常山『常山楼筆録』を読書した記録に次のようにある。

> 此頃見る常山楼筆録今夕見終わる。此書一たいを考に服部小右衛門（南郭）の門人ゆえ、徂徠を尊びたる処なきにあらざれども、本朝を卑陋せず、和漢ともに宜は宜にして悪は悪論し、武を重んじ、又風雅を加えて、貝原・白石之二氏は申に不及、東厓などにつづきての人物と思やらる。太宰などは偏にしてあしく山崎流の佐藤・浅見ごときも偏也、此筆録の末に鳩巣を甚そしり、又書中に程子をそしる、朱子は所々に賞せり、全部善言とは言まじく十に七八は金言とも申べし。（第五冊、寛政十三年二月二十三日記）[23]

「本朝を卑陋せず、和漢ともに宜は宜にして悪は悪論」することに好感を抱く一方で「偏」の字を否定的に用いている。これは他の箇所にも散見される表現で、どうやら正統をふりかざす、「偏」った思考を嫌ったというのが妥当なようである。なお、「山崎流の佐藤・浅見」とは、藩の崎門朱子学の流れをさしており、直侯は山崎闇斎を悪くは言わないが、継承者の佐藤・浅見の学問を嫌ったようである。

自らで学ぶ楽しみを知っていた直侯には、新発田藩の教学は読み方を強いる「掟計（おきてばかり）」にとらえられていた。その不満が書籍冊数改書並由来書に吐露されているのは、蒐書活動への意識を知る上で興味深い。

ただ、直侯が実際に行った政策をみると、臣下や庶民への学問奨励、崎門学の推進という直養時代の踏襲そのものであった[24]。これは直侯が藩主となって以降も、直侯が自身を模索する年代にあって、先代直養やその臣下が旧来の方針を主導したことに理由があると思われる。また直侯が家督を継ぐ際、「清涼院様一件」という世継を巡る藩内の諍いが生じ、それをめぐって幕府の厳しい処分がくだり、財政難に陥ったばかりか、藩内は派閥争いが激化した。そうした状況下ではまずは旧来の方針にしたがい、藩内の派閥争いの収束と財政難の解消を念頭に考えざるをえなかったと考えられる。

(2)直侯の「病弱」と本草学

次に直侯の「病弱」と「本草学」の関係を考えてみたい。実は直侯自身が⑬『修徳院書籍冊数改書並由来書』に自分の病弱を吐露しているし、新発田藩の本紀にあたる「御記録」にも周囲の所見としてそうした一文が見える[25]。実際、彼が夭折してしまったこともそれを裏づけよう。

では彼は自らの病に備えて蔵書を蒐集していたのであろうか。これに関して興味深い史料がある。享和元年、正月から六月にかけて、溝口直侯が藩士、永山道修を介して小野蘭山に質問をした四通の手紙と返信一通が現存している[26]。永山道修は藩医であったとする説があるが、新発田藩の「世臣譜」に永山家の名は見えない[27]。ただ昌平黌の『升堂記』に溝口家家臣として名があり[28]、小野蘭山に面識があった[29]。その手紙で直侯は小野蘭山に新発田近隣の物産について質問している。

> 越後焼山と申山谷中に間々掘出候由ツブ石と申物漢名考証承度候。則玉人に雕磨いたさせ候分為抜遣候。

この焼山は新発田領内のそれであろう。鑑定のために小野蘭山にツブ石を送ったようである。また、栗田によると、『渉猟抄』に数十種の本草書、地誌紀行を引用して、領内の島見浜に鰯網にかかった異魚を「鱘魚」だと考証しているという。

また、中国や朝鮮半島の物産に興味を示し、小野蘭山に次のような書籍について質問、または借書を請うている。

『広東新語』、『養花録』(朝鮮)、『東京夢華録』、『汝南圃史』、『斉民要術』

これらは蘭山の返信をまって、版を選び入手したものと、書写させてもらったものとあるようである。その典籍名は⑫『修徳院書籍目録』に逐条、記載がなされている[30]。ちなみに『汝南圃史』、『斉民要術』はとくに穀物、植物の栽培において詳しい漢籍である。

さらに直侯は蘭学関係の書物にもよく目を通し[31]、小野蘭山への手紙に、漢名不詳の和産品について、「紅毛」の書を参照して考証してみたいのだが、欧米の物産の漢名やその地のことを考証した典籍を知らないか、などとも質問している。

また、加賀藩の蔵書が豊富であることを知り、入手しにくい典籍を校訂のために書写させてもらっており、それも⑫に反映されている[32]。

このように直侯はしばしば小野蘭山に意見を聞き、当時の本草学・博物学で分る限りのことを知ろうと、典籍を博捜していた。その蔵書目録からは、考証に没頭していく直侯の姿をうかがうことができる。

⑫『修徳院書籍目録』に興味深い典籍は少なくないが、とりあえず、注目しておきたい一点は、⑫と②『諸書籍読見済留記』の寛政十二年正月元日～同五月六日、新発田の分に記録されている『琉虬百花譜』である。これは薩摩藩にいたことのある本草家、佐藤成裕の手に成るもので、写本の形で流布していた。現存写本の状況については別の機会に論じたいが、確認でき

るものは十点程度にすぎず、流布したのは佐藤が米沢藩での採薬調査と本草学の講義をした寛政六年より後にその弟子達が校訂してからであったとおもわれる[33]。現存する写本で最も古い紀年は寛政十二年(水戸藩医、原玄与による）であるから[34]、寛政十二年前半に直侯が琉球百花譜を入手しているのはきわめて早い。また⑫の書目には『米澤侯問答（序）』という典籍が収録されている。おそらく上杉治憲（鷹山）の施策を喧伝したもので、その蔵書に他藩の動向を記した資料は珍しい[35]。こうしたことから直侯は、ちょうどこの頃に佐藤のような本草家が薩摩藩、白河藩、米沢藩等の諸藩で採薬調査をおこない、薬草園をつくっているという動向なども意識していたと推測される。このことは直侯の閲読した記録に地誌や地方の物産録、採薬録が複数含まれていることからも支持できる[36]。

以上を要するに、直侯が本草書を好むようになったきっかけは彼自身が病気がちであったことや、幼少時に武者絵本やイメージが描きやすい軍書などに興味を持ち、書籍を「自読」する楽しみを知ったことに由来する。しかし、その後の蒐書傾向をみると、彼は当時の学問の潮流をみていくなかで他藩がそれをどのように活用しつつあるのかも意識しており、それを藩政に活かす準備していたようにも推察される。

しかし、直侯は「清涼院様一件」以来の藩内の諍いが収束せぬなか[37]、その知識を藩政に活かす機会のないまま、享和二年に二十五歳で歿した。

おわりに

以上を要約すると以下のようになろう。

『修徳院書籍目録』と『旧君公御蔵書目録』は藩の蔵書の全体像と藩の学問の変遷を推測するうえできわめて重要な資料である。また、直侯期の蔵書の過半以上を明示するもので、直侯の本草学や貝原益軒、新井白石への傾倒ぶりと彼自身の成長過程をうかがうことができる。

『旧君公御蔵書目録』は歴代藩主が新発田藩の特徴である崎門朱子学をどのような典籍をとおして学んだか、またそれらをもちいてどのように民衆教化をおこなったのかを理解する手がかりの一つになるとおもわれる。

最後に、直侯歿後の蔵書の行方を考えながら、その存在を新発田藩と周辺地域の文化史のなかに位置づけておこう。

新発田藩は江戸時代、つねに溝口氏のもとにあって、一貫して政策を行いやすい環境にあった。そうしたなかで早くから学ぶべき学問が定められ、藩校や医学を学ぶ場がおかれ、庶民教化策が推進された。そうした環境下で藩内の法は明律を参照して定められたし[38]、崎門学派の根幹をなした勤王精神の浸透は結果的に戊辰戦争の戦火から町を救ったとみることもできる。

ただ、上から学ぶべき学問の範囲を定め、それを墨守しつづけたことは、蘭学や洋学などの新しい学問への興味をそぎ、新しい分野での人材の輩出を妨げた可能性も否定できない[39]。直侯をついだ直諒は夭折した父の学習に多大な関心をいだき、蔵書の把握をこころみたり、藩士

を江戸遊学させた後に藩校の教授にしようと、藩学の改革をしようとしたが、在任教官達の反撃にあい、果たし得なかったという[40]。幼少の頃から崎門学者に教育を受けた直諒は、結局、異学に関心をもつことを避けたし、家臣や庶民にもそうさせた。そうした環境下では直侯によって集められた実学書中心の蔵書のおおくは、代々、引き継がれるのみで死蔵されたか、藩医に利用されるにとどまったと思われる[41]。直侯は藩主ながら新発田藩の「正道」からはずれた存在となってしまったのである。

しかし、視線を同時代の同地域に転じれば、直侯のような存在はあらためて注目すべき存在と思われる。

直侯が本草書や地誌を中心とした読書に没頭し始めた頃、近隣の加茂の医者の家系に後に蘭医となる森田千庵(1798～1857）がうまれ、次の直諒の時代の佐渡には洋学者、柴田収蔵（1820～1859）が登場する[42]。時は本草学、続いて蘭学、洋学への関心が高まり、江戸や長崎で就学した者がその技術や世界観を地方に広め始めたころであった。

また、同じ頃、藩領の新津には崎門学に目を配りつつも、広い蒐書をこころがけた桂家万巻楼のような蔵書家が、藩が書籍を借りにくるほどの蔵書量を誇り、藩外の文人、学者と交流をもっていた[43]。

市井の人々と藩侯とは同列に論じ難いが、直侯の興味と行動はこのような地域の学問の潮流に共通点をみることが可能であり、その先駆的存在に位置づけることができる[44]。それは、彼らの興味を支えたのが、出版文化の隆盛と書籍の地方流通であったという点で共通しているためと思われる。

今後、本稿でおこなった整理を検証すると同時に、より広域の動向と比較していくことで、一藩の蒐書のありかたを考えていくこととしたい。

＜注＞

1 新発田藩の学術と教育については、小村弋(執筆)『新発田市史』(上巻、pp.589～664)（新発田市役所、1980）にその概観が示されている。詳論として、藤井重雄に以下の論文がある。

「新発田藩の藩学について－闇斉学派時代以前」(『新潟大学教育学部紀要』4(1)、1963(a))、「異学の禁について－新発田藩に於ける」(『新潟大学教育学部紀要』5(1)、1963(b))、「異学の禁について(2・完)－新発田藩に於ける」、(『新潟大学教育学部紀要』6(1)、1964)。

また社講制度や藩校をふくむ歴代藩主の教学策については、山下武が詳細に論を展開している。本稿と直接関わりのあるもののみ示す。『学術研究』は早稲田大学教育学部刊行の学術誌。

「新発田藩の教育－第八代藩主溝口直養の教学策を中心とした考察」（『学術研究』人文科学・社会科学篇(16)、1967）。「新発田藩における庶民教育政策－教学精励者の表彰と社講制度の発達を中心として」（『学術研究』人文科学・社会科学篇(17)、1968）、「新発田藩の教学策」（同『江戸時代庶民教化政策の研究』校倉書房、1969）。「新発田藩教育の一考察－九代直侯より十代直諒の執政にいたる」（『学術研究』教育・社会教育・教育心理・体育編 (20)、 1971）、「新発田藩の庶民教育－十代藩主溝口直諒時代の政策を中心として」（『学術研究』教育・社会教育・教育心理・体育編 (22)、1973）、「新発田藩庶民教育の一考察－社講制度を中心として」（『早稲田大学大学院文学研究科紀要』(21) 、1975）、「新発田藩における出版書の一考察」（『学術研究,』教育・社会教育・教育心理・体育編(26)、1977）、「新発田藩の医学校」（『学術研究』教育・社会教育・教育心理・体育編(27)、1978）、「新発田藩の藩校道学堂について」（『学術研究』教育・社会教育・教育心理・体育編(28)、1979）、「溝口直諒の教学観に関する一考察」（『学術研究』教育・社会教育・教育心理・体育編(36) 、1987）。なお、以下では、煩をさけるため、以上の藤井・山下論文の引用は〔山下 1987〕のように表記した。

また、高木靖文が藤井、山下による藩校とその変遷に関して批判整理をおこなっている。高木靖文「近世藩校名称の一考察－新発田藩「道学堂」の場合」(『新潟大学教育学部紀要』人文・社会科学編、30(1)、1988）。同「新発田藩校「講堂」の教育と伝統」（『学校教育研究所年報』(32)、 1988）。

2 前掲注 1)所引の論文中、新発田藩（藩主をふくむ）の蔵書量やその傾向について言及するのは、〔山下 1977〕のみで、「御在所御手元附経書目録」によって「藩主の手元にあった書物は二千五百冊をくだらなかった」とするにとどまる。

3 拙稿、「米沢藩『本草考彙』研究序説」（『新潟史学』59 号、2008）。同「米沢藩と藩校興譲館の蔵書目録について」（朝倉治彦（監修）岩本篤志（編）『米澤藩興譲館書目集成』第四巻、ゆまに書房、2009）。

4 栗田元次「近世における大名の好学と溝口直侯」、『史学研究』第 5 巻第 2 号、1933。栗田は直侯の年令を『寛政重修諸家譜』にしたがって計算しているが、本稿では『新発田市史』にしたがう。なお、沢弋「好書太守溝口直侯」(『医文学』113 号、1934）は、資料出典を示しておらず、栗田論文が用いたのと同じ資料を栗田の落手以前に参照し得たか、あるいは栗田論文を整理し直したとみられる。また新発田市立図書館が所蔵する「読見済書籍日記抄録」（A01-領主 20）は、栗田論文か沢論文から日記に収録された書名のみをぬきだし、近代に作成されたものと思われる。

5 長友千代治「軍書の読者」（同『近世貸本屋の研究』、東京堂出版、1982）。

6 栗田元次「栗田文庫善本書目」（同『書誌学の発達』青裳堂書店、1979)。

7 新発田藩は崎門学の教学のため、多くの藩版を刊行した。〔山下 1977〕のほか、阿部隆一「解説」(『山崎闇斎学派』(日本思想大系 31)、岩波書店、1980)、高橋明彦「新発田藩版とその原版」(『江戸文学』16 号、1997）に現存する典籍にもとづいた解説、分析がある。

8 栗田「近世における大名の好学と溝口直侯」に、「彼の最後の年享和二年正月から三月五日まで、封地新発田にあって三都の書肆から買ったものだけでも諸所買上書籍留記に四十部に及んで居る」とあるので、修徳院書籍目録の完成後から亡くなるまでの約一年間に 80 部前後の増加があったとしても無理とはいえないであろう。

9 直諒が直養と直侯の学問に憧憬を抱いていたことについては、〔山下 1987〕に言及がある。

10 『岩瀬文庫図書目録』(昭和十一年二版第三刷、財団法人岩瀬文庫、1993)。昭和十年三月時点で受け入れられていた書籍を収録する。

11 前掲、長友「軍書の読者」。

12 木村蒹葭堂の蔵書の幕府による購入については、小野則秋(著)『日本文庫史研究』(下巻、pp.472～482、臨川書店、1988)、有坂道子「木村蒹葭堂没後の献本始末」(『大阪の歴史』(54)、1999)に詳しい。

13 高橋明彦「昌平黌の怪談仲間－古賀侗庵『今斉諧』の人々」(『江戸文学』12 号、ぺりかん社、1994)に友田厚質に言及した箇所がある。友田は古賀門下かその知己であった可能性がある。

14「昌平黌藏書目録」(小川武彦、金井康(編)『徳川幕府蔵書目』第 10 巻、ゆまに書房、1985)。

15 その変遷については、前掲、小野『日本文庫史研究』(下巻、pp.64～78)に詳しい。

16 前掲、『新発田市史』上巻、p.597～598。

17 前掲、『新発田市史』上巻、p.594。

18 直養の隠居の動機については、〔藤井 1964〕に推論がある。

19 前掲、栗田「近世における大名の好学と溝口直侯」。

20 直養が崎門学を藩の学問として採用し、事実上他学を排除する以前、藩内には相当数の蘐園学派がいたとおもわれることが〔藤井 1963〕に指摘されている。崎門学に批判的な眼を向けた直侯の存在は先代以来、崎門学を支持した一派には不安視されたであろう。

21 前掲、栗田「近世における大名の好学と溝口直侯」。

22 「修徳院書籍冊数改書並由来書」に記されているほか、前掲、栗田「近世における大名の好学と溝口直侯」が用いた資料中にも言及がある。

23 前掲、栗田「近世における大名の好学と溝口直侯」。

24 〔山下 1971〕によれば、直侯は「藩内きっての学者をあつめて経書の輪講」をさせ、熱心な出席者を表彰するなど、「講堂」を中心に直養同様の活動を精力的に続けたという。『新発田藩史料(1)藩主篇』(新発田市史編纂委員会、1965)収録の「御記録」巻九・修廟紀でも直養期と大きく異なる活動はみられず、むしろ積極的に先代の踏襲をおこなったようにみうけられる。

25 「御記録」巻九・修廟紀の「御遺事」に「御身も又御多病にましまし日として薬餌をめされざることも稀にして」とある。また「公日に夙に起出給ひ、浄几を正し筆硯をそろへ、古人の簡編図書をくりひろげ給ひ、終日申々夭々としてましましける」、「只時にふれ好ませ給ふは野花山草のみなりけり、かつて御庭の砌に花木薬草を植おかせ給ひて」、「文雅の君子とも申奉るべし」という周囲がみた直侯像が示されている。

26 現在「蘭山問目留簿」(二冊)として天理図書館が所蔵する。その内容は福井久蔵「溝口直侯侯と小野蘭山」(同著『諸大名の學術と文藝の研究』、厚生閣、1937)が翻刻する資料に該当すると思われる。このほか溝口直養筆とされる「読見済留簿入」(答永山道修書、桜花命名之書など)を京都府立植物園が所蔵するとされる。(以上、所在については国文学研究資料館「日本古典籍総合目録」の情報による)。筆者は未見ではあるが、直侯期の資料にもおもわれる。

27 永山道修を藩医であったとするのは、栗田「近世における大名の好学と溝口直侯」だが、現在のところ、それを裏付ける史料をみつけえていない。

28 関山邦宏(代表)『「升堂記」(東京都立中央図書館河田文庫本)翻刻ならびに索引』(平成 9 年度科研費報告書、1998)。同『升堂記(東京大学史料編纂所所蔵)翻刻ならびに索引』(平成 8 年度科研費報告書、1997)。両記録ともにその名があるが、記載が詳しい河田文庫本では寛政六年五月十六日升堂の段に「溝口出雲守家士　上屋敷住居／永山道修／紹介片瀬作右衛門」とある。

29 「修徳院書籍冊数改書並由来書」にこれにふれる箇所がある。

30 『広東新語』、『産物唐蛮雑見』、『居易堂名花譜』、『書隠叢説』。『広東新語』は新発田市立図書館に写本五冊が残存する〔V09 教書 503〕。蘭山と直侯の交流を示す史料として興味深い。

31 『紅毛雑話』、『阿蘭陀本草外編』、『和蘭産物図考』、『和蘭翻訳草木略』、『蘭学階梯』、『天球全図』、『泰西輿地図説』、『和蘭内照官能真言』、『解体新書』、『解体薬図』など多数が書目に収録されている。またそのうちの過半を読了したことが栗田「近世における大名の好学と溝口直侯」所引の『諸書籍読見済留記』からわかる。

32 『採薬使記』、『三韓紀略』、『瀟水先生上諸相公書』、『蝦夷志』、『硯譜』、『鳩巣小説』。また、栗田「近世における大名の好学と溝口直侯」によると『諸書籍渉猟抄』に加州(加賀藩)の蔵書を借りて校合にもちいたこと、その蔵書量の豊富さへの羨望などが記述されているという。

33 佐藤の米沢藩での活動については前掲、拙稿「米沢藩『本草考彙』研究序説」参照。なお、『琉虬百花譜』の市立米沢図書館所蔵本(絵のみ)と国会図書館所蔵旧興讓館蔵書本（文章のみ）は同一写本の絵と文章部分をわけてしまったものとみられるが、詳細は別稿にしめすこととしたい。

34 東京都立図書館蔵〔加 3980〕。水戸藩医、原玄与による写本。

35 ただし、水戸藩主にかかわるものが散見される。また、『米沢侯問答序』は新発田市立図書館に写本が現存する〔V09 教書 778〕。内容は、問答形式で治国平天下について論じたもので、まだ仔細な検討をしていないが、上杉治憲を明君として喧伝する類かとおもわれる。これに関係すると思われる考察に、小関悠一郎「明君録」の作成と明君像の伝播・受容－『米沢侯賢行録』を中心に」(『書物・出版と社会変容』第 1 号、2006）があり、『米沢侯賢行録』の成立を治憲存命中とし、明君像がどのように形成されたかをみている。

36 地誌や地方の物産録は膨大な蔵書の相当量を占めているのでいちいちとりあげないが、採薬記関係では、『御薬園領植村氏蒙台命諸国巡行記』、『採薬録』、『採薬使記』（前田本写）などがみられる。

37 前掲『新発田市史』(上巻、pp.463～469)によれば、直侯の没する直前、藩内では徒党をくんだ権力争いが激化し、家老の何人は病と称して出仕せず、監察役は自殺、直養以来の藩校教授を務めた儒者が失脚するに至ったが、その顛末は不詳である、という。

38 藤井重雄「唐明律と藩法との関係について－新発田藩に於ける」(『新潟大学教育学部紀要』7(1)、1965)。

39 前掲、高木「新発田藩校「講堂」の教育と伝統」の冒頭に示されているように、安井息軒や坂口五峯らは新発田藩の教学の閉鎖性を批判している。

40 笠井助治『近世藩校における学統学派の研究』(上)（吉川弘文館、1969)。なお、前掲『新発田市史』(上巻、pp.475～476)によると、直諒は勧農政策をおこない、生産力強化をはかったが、その発想は主穀農業の推進が基本で、農民が利を貪りかねない養蚕業の導入を否定したという。また、直諒期はロシア船などに対する海防問題が注目されていたが、直諒は「勧学説」の中で、まず道学（崎門朱子学）を学んでこそ兵学が活きること、道学以外を学ぶべきでないことを説いている。こうした直諒の発想、政策に直侯の影はまったくみあたらない。

41 〔山下 1978〕によると、医学館の蔵書として最初に典籍が購入された記録があるのは文化五年（1808）である。医学館での輪講（公開講義）は直養期にはじまり、直侯期、直諒期は通じて盛んで、藩主の激励もたびたびあったとされるが、藩主の蔵書が貸し出されたかは不明である。直溥期には蔵書不足のため相当数の医薬書の購入を必要としたようである。

42 片桐一男「蘭医森田千庵伝研究」(『法政史学』第 14 号、1960)。長谷川一夫「越佐における西洋医学普及の基盤－森田千庵・柴田収蔵を中心として」(『新潟県史研究』22・23 号、1988)。蒲原宏「新潟県における洋学の系譜」(『越後・佐渡の史的構造』小村弋先生退官記念事業会、1984)。

43 帆刈喜久男「万巻楼書籍目録」(1)（『新津郷土誌』第 11 号、1984)、同「万巻楼書籍目録」(2)、(『新津郷土誌』第 12 号、1986)、同「万巻楼書籍目録」(3)（『新津郷土誌』第 13 号、1995)。桂家の「文庫」は寛政七年に建てられ、文化七年(1810)、亀田鵬斎が桂家を訪れ、「万巻楼記」を書いたという。

44 同時期の藩内の地域の学問、特に漢学については、帆刈喜久男「越後・佐渡と新発田藩の漢学」、同『近世越後の学芸研究　第 1 巻』（高志書院、2002）に概観が示されている。

※本稿は、新潟大学プロジェクト推進経費・奨励研究「東北諸藩における蒐書とその利用に関する研究一米沢藩を中心に」（平成 21 年度）の成果の一部である。